はじめよう！

はたらく体験

「はたらく場所」は「つながる場所」

滋賀の縁創造実践センター
働きづらさを抱える人の働く場づくり小委員会

目的　「働く場所」は「つながる場所」

「働きづらさを抱えている人がいる」ということ

「働く」ということはとても大事なことです。仕事をして成果をあげれば人の役に立っていると実感でき、収入を得ることで経済的な自立が得られます。これは人間にとって幸せの大きな要素です。しかし、一般就労を唯一のゴールとすると、それがかなわないために負い目やストレスとなり大きな苦しみを背負う人もあります。

さまざまな制度の中でいわゆる「就労支援」の事業は整備強化されつつありますが、障害者手帳がない人や経済的困窮状態にない人等、制度によるサービスの利用対象とならない人や、一般就労まで距離のある人、一般就労をゴールとしない（できない）人は既存の就労支援事業では対応が難しい現状があります。

私たちがめざすのは、つながる居場所

そこで、滋賀の縁創造実践センター　働きづらさを抱える人の働く場づくり小委員会では「傍楽（はたらく）体験」と名付けた小さな働く場の取り組みをはじめました。

制度での対応が難しい人たちにとって「家から出ていける場所」「社会（誰か）とのつながりを感じられる場所」「働くことを体験し、少しでもその対価を得られる場所」となることをめざしています。
県内のさまざまな地域・事業所と相談支援機関が連携協働して、事業所は「人の応援がほしい」業務を切り出し、体験者はその業務をやりとげることを通して人の役に立つ喜び、働いて報酬をもらう喜びを得るという、Win-Win（双方良し）の関係をつくっていく取り組みです。

実践　「働きづらい」と「人手が足りない」をマッチング★

①縁センターの会員事業所で
「人手が足りない」業務を切り出す。

②連携する相談支援機関・事業所を決め、
「傍楽（はたらく）体験」プログラムをつくる。
（体験時間の設定や報酬の支払い方法、支援者の関わり方などを相談）

③プレ実施を経て、「傍楽（はたらく）体験」として継続実施。

④支援者へのフィードバック、振り返りを必要に応じて行う。

※本冊子における表記について
「傍楽体験」・・・滋賀の縁創造実践センターモデル事業
「はたらく体験」・・・「傍楽体験」を含めた、はたらく場づくりの取り組み

コラム

いまの「働きづらさ」を考える

【相談支援機関】滋賀県地域若者サポートステーション
橋本　剛

滋賀県地域若者サポートステーション(以下“サポステ”と略)は、厚生労働省と滋賀県からの委託により15～44歳の若者を対象とした就職“準備”支援を行っています。就職への前段階として各業界の企業での職場体験、関係先施設内での1日作業体験、就職に向けたセミナー等を実施しています。そのプログラムの一環として、縁センターの傍楽体験や子ども食堂へのボランティアにも参加しています。

▲面談

90年代のバブル崩壊をキッカケに企業では即戦力人材を求める傾向が強くなり、採用の間口も狭まりました。「働ける自信がない」「就職できない」「就職したが離職」「上司からの度重なる叱責」等を体験し、児童期・少年期の辛い体験の記憶も重なり自尊心を奪われひきこもりがちな暮らしの中に身を置く方々も増え、彼らの“働きづらさ”が社会の課題となっています。

▲職場体験

働きづらさを抱える人にとって、ハローワークへ足を運び採用面接を受けることはとても勇気のいることです。(稀に、突然思い立ってそれが出来る方もいますが)。私たちは彼らの仕事復帰に向けた“第一歩”の活動の場を求めてきましたが「資源が限られている」と感じていました。そんな中で始まったのが“はたらく体験”です。

“はたらく体験”の場では、主催団体の職員さんや、さまざまな境遇の方々同士が協力し合い作業を進めていきます。人の役に立てた体験により、彼らは少しずつ自信をつけていきます。“はたらく体験”での活動を通して、人の温かみに触れることも大きな要素です。

▲交流サロン

彼らが“はたらく体験”に参加する動機はさまざまですが、働くことの“第一歩”の場、人の温かみに触れる場としてとても大切な場となっています。それが出来る資源は、まだまだたくさん地域に埋もれていると感じる今日この頃です。

傍楽(はたらく)体験　一日の流れ

10：00　「おはようございます！」体験スタート。
自己紹介、職場＆作業説明

10：10　作業スタート。教え合ったり、みんなで協力してすすめます。

12：00　作業終了。本日の成果を確認後、みんなでお弁当♪

12：40　アンケート記入。旅費をお渡し後、解散★
お疲れ様でした！

※こちらは一例です。

滋賀県社会福祉士会で傍楽（はたらく）体験！！

公益社団法人 滋賀県社会福祉士会

開催日　：月1回　10：00～14：00
（昼食休憩含む）

体験内容：発送作業

参加者数：５名程度

窓　　口：滋賀県地域若者サポートステーション

▲ホチキス止め

▲資料組み・封入

体験者の声

・周囲の人と一緒に作業をスムーズにできた。
・慣れてきたおかげで効率の良い方法を見つけ出せました。
・繰り返しの作業で大変さも感じましたが、今日は作業に参加できて良かったです。

♪担当者からの声♪

「傍楽」ということばには、傍（はた・近くにいる人）を楽にするという意味が込められています。一方で「働く」というと、今の社会の中ではとかく個人としての生産性や効率ばかりが重要視されます。しかし、私たちは、常に誰かと助け合い、つながりあって生きています。誰かの「はらたく」があって、この「はたらく」につながり、そして次の誰かの「はたらく」へとさらにつながっていく、その過程こそが「傍楽」ということなのだと思います。ですから、どんな小さな働く場であっても、そこで一人ひとりが生み出しているものは、他の何ものにも代え難い、貴重なとても大きなものです。「傍楽」体験を通じて、その「つながり」を感じることができ、自分の存在そのものを大切に思える場になるようにと願っています。

担当：横田章夫さん

滋賀県介護福祉士会で傍楽（はたらく）体験！！

一般社団法人 滋賀県介護福祉士会

開催日　：隔月1回　10：00～14：00
（昼食休憩含む）

体験内容：発送作業

参加者数：４名程度

窓　　口：滋賀県地域若者サポートステーション

▲ラベル貼り

▲昼食はみんなでお弁当♪

体験者の声

・想像していたより楽しかった。久しぶりに他人と仕事のような作業をして、昔働いていたときのことを思い出した。
・今回は参加者が多かったので最後まで完了することができ、中々の達成感がありました。
・いろいろ体験してみたいと思っています。

♪担当者からの声♪

一般社団法人　滋賀県介護福祉士会が傍楽体験の趣旨に賛同し、利用させていただくようになって２年になります。その間滋賀県地域若者サポートステーションを通し、多くの方々に当会の発送業務のお手伝いに来ていただきました。遠くは湖北からお越しいただいた方や、何度も参加していただいた方もおられ、作業内容にも慣れていただき、大変心強い戦力となっていただいています。皆さん作業に対する姿勢は真摯で、いつも時間内に作業を終わることが出来ています。これからもこのご縁を大切に、少しでも皆さんが社会に関われるようにお手伝いが出来たらと考えています。

担当：前田美代子さん

滋賀県社協で傍楽（はたらく）体験！！

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会

開催日　：毎月１～２日　10：00～12：00　＋昼食

体験内容：発送作業・古切手の整理・名札作成・
　　車いすのメンテナンス　等

参加者数：５名～

窓口　　：滋賀県地域若者サポートステーション、
　　大津市社会福祉協議会、
　　ReLife（当事者グループ）

早く終わった日はカロムに挑戦！
ルールを教えあったり、「上手！」
等声をかけあったり、大盛り上がり
でした^^

▲Tシャツ畳み・梱包

▲車いす空気入れ

体験者の声

・身体を動かす作業からチラシの封入作業まで色々なことを体験できて良かった。
・服をたたむ作業ははじめ迷ったけど楽しかったです。
・周りの方々の作業を見て効率の良い方法を探すのは大事だと思った。
・労働は素晴らしいとしみじみ感じました。

♪担当者からの声♪

体験では、参加者のみなさんがとても集中して作業をしてくださって、作業も早く、いつも大変助かっています。県社協内でも定着しており、各部署から様々な依頼を受けています。これからも楽しくやりがいを感じてもらえる居場所でありたいと思います。

担当：葦原有加

滋賀県介護支援専門員連絡協議会で傍楽（はたらく）体験！

滋賀県介護支援専門員連絡協議会

開催日　：年数回　10：00～12：00　＋昼食

体験内容：発送作業

参加者数：４名程度

窓　　口：滋賀県地域若者サポートステーション

体験者の声

・いつもと違う作業が出来て楽しく思いました。
・時間をかけていくうちにコツをつかめて、紙をどうやったら早くとれるかわかりました。
・コツコツと一歩ずつ自分に出来る事をやっていきたいです。

▲資料組み

♪担当者からの声♪

作業中は、どうすれば効率よく作業が進められるかを参加者自身で考え提案される場面や、お互いに声を掛け合いながら積極的に取り組まれている姿が見られました。傍楽体験を通じて、参加者の方に社会とのつながりや、役割を感じて頂くことができたのではと思います。又当会としても、傍楽体験事業を経て、多様な就労の在り方について考える機会となりました。

担当：楠神渉さん・細川純子さん

高島市で傍楽（はたらく）体験！

社会福祉法人 **虹の会**

開 催 日：原則平日10：00～12：00
（その他の曜日、時間帯も相談に応じます）

体験内容：リネンのたたみ、マラソンタグの洗浄、
移動販売ぎょうれつ本舗の販売補助 他

参加者数：数名

窓　　口：高島市内の自立相談支援機関窓口、
子ども・若者支援センター、
障がい者相談支援センター、
働き暮らし応援センター　等々

▲マラソンタグの洗浄

▲リネンのたたみ

虹の会では、平成28年度より「傍楽体験」に取り組んでいます。当初、法人から「リネンのたたみ作業」を切り出し、スタートした「傍楽体験」。

その後、法人内の理解が進むにつれ、資料の印刷や封入、草刈、移動販売の補助等、徐々に仕事のバリエーションを増やすことができました。また、年間の延べ体験者数も100人を超え、さまざまな関係機関から働きづらさを抱える人のニーズをつないでいただけるようになりました。

しかしながら、「傍楽体験」はあくまで社会参加のきっかけづくりであり、福祉サービスのように継続して利用いただけるものでもありません。一定期間体験され、「ゴールが就労ではない」と思われる人のための居場所（期間を定めず、寄り添い支援ができる場所）が必要だという気づきは、支援者共通のものでした。

そこで、2年目（平成29年）の下半期、法人内の空きスペースを活用して社会的居場所「虹カフェ」を開設し、「傍楽体験」と並行して運営をはじめています。

平成29年度のデータ

傍楽体験 参加実人数	12名
のべ人数(＝実施回数)	133名(回)
傍楽体験平均参加回数	11回
最も多かった年齢層	30歳代
男女比	6:4
傍楽体験終了後の状況	12名中、3名が就労 （就労継続支援A型、B型事業所）

♪担当者からの声♪

長期的な視点を持って寄り添うことと、地域や暮らしの場を意識したコーディネーションを心掛けています。

仕事や場を提供するだけでなく、その人の暮らし全体に目を向けたいと思っています。　　担当：杉本学士さん

社会的居場所
「虹カフェ」OPEN！

「次のステップに進めないから、再びひきこもる」のではなく、気軽に出かけられる居場所として、虹の会事業所の空きスペースを活用して運営しています。（社会福祉法人の地域貢献として取り組んでいます）

私の「はたらく」STORY　vol. 1

子ども食堂のボランティアで、子どもとかかわる楽しさ発見！！
現在学童クラブで新たな挑戦中★

M. Dさんの物語

▲サポステの相談員・赤星典子さんとM.Dさん

傍楽体験は、一歩踏み出すきっかけ！

M. Dさん（30代）は2017年4月に初めて傍楽体験に参加しました。滋賀県地域若者サポートステーション（以下、サポステ）が月に1回開催しているハローワークの出張相談で適職相談を受けたことがきっかけで、Mさんはサポステに通うことになりました。そこで県立長寿社会福祉センターで開催される各団体の傍楽体験を紹介されました。

「体験場所が家から近かったので、バイクで計５回ほど参加しました。最初は緊張しつつも、発送作業をミスなく出来るよう工夫しました。そこにはいろんな方が来られていましたが、自然となじむことができたし、外に出て行く場がなかったので、外へ出る良い機会だと思って参加していました。」

▲子ども食堂「おいでや」での流しそうめんの様子

自分を変えてみたい！

「子どもが苦手だと思っていたんですけど、『自分を変えてみたい！』という気持ちがありました」と語るMさんは、傍楽体験や企業での職場体験等、様々な経験を積む中で、社会福祉法人真盛園が運営する地域交流センター「老いも若きも」で開催されている子ども食堂「おいでや」のボランティアをサポステから紹介され、2017年夏に初めて参加します。

「子ども食堂のことは、紹介されて初めて知りました。夏だったので、竹筒でつくった流しそうめんを小学生を中心とした30～40名の子どもたちとわいわい楽しみました。その後、子どもの宿題をみたり、一緒に人生ゲームや鬼ごっこをしたりして遊びました。人形遊びをしている男の子や、詰め将棋をしている女の子等、個性豊かな子どもたちと過ごすことはとても面白かったです。大変だったことと言えば、外にテントを設営したときに指を挟んでしまったことくらい。特に何が楽しかったというわけでもないんですが、帰宅して『今日は楽しかったな』って思えました。」

その後も子ども食堂が開催される度に、ボランティアとして参加し、子どもと関わる楽しさを知り、そういった仕事に就きたいと思ったMさんは、学童保育の仕事を探し見事採用されます。2018年7月から、民間の学童保育所にて週に３日、14時から18時で働き始めました。

「こないだまでできなかったことを子ども達ができるようになった等の、子どもの成長のひとつひとつを身近で感じることができるので、とても楽しいです。勤め先の上司がけん玉が得意で、子ども達も僕より上手なので、子どもたちにけん玉を教えてもらっています。休みの日にも、家でこっそり特訓中なんですよ。笑　個性豊かな子どもたちをずっと見守っていけるように、今後は、正社員を目指して頑張りたいです！」

★過去の自分に伝えたいメッセージ★

さまざまな働く場にふれることで、いろいろな会社・職場があることがわかり、自分の視野が広がったし、発見をたくさんさせてもらったと感じています。今もし過去の自分が目の前にいたら、怖がらずに一歩外へ出てみるように伝えたいです。

私の「はたらく」STORY　vol. 2

傍楽体験は、例えるなら「船の舵」。
方向をちょっと変えたことで、その後が大きく変わった！

Y. Iさんの物語

▲虹カフェにて

失敗して、“ひとり”の時間を経て、自分のなかの「はたらく」が変わった

「仕事さえしていれば自分ひとりでも生きてけるような気がして、人とのつながりを断ってしまったことが若いころの失敗。お金はあっても、そこに幸せはなかった。」

高島市に暮らすY. Iさんは、かつては名古屋でトラック運転手としてコンビニの深夜配送の仕事に従事。常に全力で仕事に取り組んでいましたが、ハードで合わない仕事に自分を押し込める日々の中で気づいたときには体も心もボロボロになっていたといいます。

退職後は仕事探しを急がず、ゆっくりやってみようと考えて1年が過ぎたところに「高島市で傍楽体験」の取り組みに出会いました。傍楽体験のメニューがどういうものなのか、自分が体力的にもつかが全くわかりませんでしたが、傍楽体験という機会でお試し的に体験。「立ち仕事は大変やけど、いけそうという手ごたえを感じました。」その後、ボランティアへと形を変えながら、約一年間活動。現在はパート従業員として、企業に勤務して7か月がたとうとしています。

「結局、『仕事』って『手段』なんですよね。僕は仕事を『目的』にしてしまっていたから、それが間違いでした。普通の人はもっと早いうちに気付くんでしょうけど…できなかったからこんなになっちゃうわけで。僕みたいな人は苦労しますよね。」

しかし、そうした挫折があったからこそ、大事なことに気づけて楽になった、とYさんは笑います。「いまは給料もすごく高いわけではありませんが、目標があるからそこに向けて続けようと思えるんです。昔やったら、こんな風に思えなかったかもしれない。傍楽体験のおかげで、若いときには気づけなかった自分の生き方に関わる新たな発見があったんやと今では思っています。」

傍楽体験卒業後も、虹カフェでほっこり♪

今は週5日フルタイムで働き、休日はあちこちに顔を出しているというYさん。取材当日も休みで虹カフェを訪れ、備品であるパソコンの部品交換をお手伝い。「虹カフェは、年齢も目標も思いも違う人たちが集う場。着かず離れず、居心地がいいです。悩みを聞いてもらえるのがありがたいので、休みが合えば訪れています。」

Yさんにとって傍楽体験は「船の舵」だったといいます。「方向をちょっと変えただけで、その後がどんどん変わっていきました。」
そんなYさん、今の目標はキャリアアップです。「職場にもう少しお給料をいただけて、自分の強みを活かせそうな業務があるので、いずれそちらに挑戦できたらと思っています。」

★過去の自分に伝えたいメッセージ★

「自分はこうだから」と決めつけた生き方をしないことが大切なのかな、と今では思っています。自分を追い込まない、恥ずかしい、自分には必要ないと思っていたことが実は必要なことかもしれない。歳を重ねると、自分の可能性を狭めるような世の中の声に出会うこともありますが、そういうものに負けず、本当にしたいことをまずは自分が認められたら、すこし楽に生きられるんじゃない？と伝えたいですね。

▲リネン工場

現在パートとして勤務するリネン工場。ホテルで使用されているタオルや新幹線のピローカバー等の洗濯を行っています。

「はたらく場」座談会

～小さなはたらく場のつくり方～

参加：「働きづらさを抱えた人の働く場づくり」小委員会

城　貴志	ＮＰＯ法人滋賀県社会就労事業振興センター
眞弓　洋一	東近江市社会福祉協議会
橋本　文男	湖北地域しょうがい者相談センターほっとステーション
杉本　学士	社会福祉法人　虹の会
森野　実知子	滋賀県労働雇用政策課
山崎　晴美	大津市社会福祉協議会
橋本　剛	滋賀県地域若者サポートステーション
白杉　由美子	野洲市社会福祉協議会

――平成27年度から始まった「傍楽（はたらく）体験」の取り組みは、現在県内5か所で継続的に運営されています。

杉本：この数字をひろがったと見るのか、まだまだひろがってないと見るのかですよね。切り出せる仕事はどの法人にもあるかと思いますが、法人内にそれをコーディネートする人がいるのかどうかがひとつのポイントですね。組織の中で横断的にコーディネーターとして活動する人の存在は必須で、今後の法人は、視野を広く持つ力が求められます。

城：同じ組織にいても自分のセクション以外の仕事を見ることは、なかなか難しいですよね。法人内でコーディネートすることは職員の視野のひろがりにもつながり、組織の活性化になりますね。

――滋賀県社協も、傍楽（はたらく）体験のメニューを組織の掲示板にひろく募集するようになって、さまざまな部署から声がかかるようになりました。体験メニューもひろがるほか、職員が互いに他部署の業務内容を知るきっかけにもなっています。

橋本剛：そうした工夫をいただくことでさまざまな働く場ができると、好きなことや適性発見の可能性がよりひろがります。車椅子のメンテナンスなど達成度が目に見える作業を「役に立っている実感がもちやすい」と喜ぶ利用者もおられます。

――東近江市社協では、Ｓ＆Ｓ（スマイル＆スタンド※P. 8参照）として、地域の企業と市社協がつながることで相談に訪れた方の可能性がひろがっていますね。

眞弓：利用者のなかには企業で仕事をしているうちに誘われて、その企業で社員として就職された方もおられます。一般就労がゴールではありませんが、ひとりひとりの持つ可能性を見つけられる場所として大事にしたいですね。重要なのは支援方法ではなく、本人を主体に置き、思いを引き出して、自分の力でできることをするために、どのように取り組むのかです。私たちの実践は本人の思いをかなえるために必要だったから、本人の暮らしの場である地域とつながった形です。

城：そうして地域や関係機関との日頃からの顔の見えるつながりがあると、次の活動の幅も広がっていきますよね。

山崎：大津では，働きづらさを抱える方を対象にサロンを開催しています。サロンに参加されず、連絡がない方からも、サロンの案内が届くだけで安心するという声を聞きました。言葉や行動では見えにくくても、やっぱり何らかのつながりを求めておられるんだと思います。そうして出会えた方を次につなげる場所があると、支援者も安心して関われます。

白杉：社協の窓口にボランティアしたいと相談に来られ、よくよく話をお伺いしたところ、「これまで家にひきこもりがちだったけど、何かしたいんです」とおっしゃった方がおられました。そのような方にどういう場を用意できるかが今後の課題ですが、新たにつくるばかりでなく、子ども食堂などの地域資源とも連携できたらと思っています。

――遊べる・学べる淡海子ども食堂は現在県内115箇所※にひろがっています。「小さな働く場」と「子ども食堂」のコラボができれば、取り組みは大きく広がりますね。（※平成30年12月25日現在）

橋本文：滋賀の子ども食堂は、「遊べる・学べる淡海子ども食堂」として、食事を囲むだけでなく、遊び相手や勉強を教える等、大人もいろいろな関わりが考えられるところが良いですね。

杉本：そうそう。「働く場」があればそれでよい、というわけではないんですよね。「働く」はあくまで「暮らす」のなかの一部分でしかなく、その「暮らし」も「地域」のなかにあるんです。支援者は、そうしたことを俯瞰して見つめ、寄りそうテクニックが必要ですね。

社協の強みを活かしたはたらく場

S&S（スマイル&スタンド）

東近江市社会福祉協議会

仕事に就けず社会から孤立しておられる方々との出会いの中で、「社会とつながれる居場所があれば…」「自分に合った働き方を見つけてもらえる場があれば…」そんな思いで始まったのがS&Sです。

対象者は限定していないので、10代から60代くらいの幅広い年齢層の方の参加があります。参加の前夜は寝付けなかったり、家を出る前は「私が行ってもいいのかな」と不安になったり、家族から受ける就職へのプレッシャーなどのさまざまな辛い思いと、『働きたい』という前向きな思いとの間で葛藤しながら参加をされています。

S&Sの活動内容は多種多様です。いろんな方がおられるので、できるだけ幅広い活動メニューを準備できるようにしています。とはいえ、社協内で切り出せる仕事は限られているので、地域住民の方や企業の力をお借りしながら、活動や働く場を提供いただいています。

職員も参加者と一緒に作業をし、その『場』で改めて感じたのは、『働く』ことの大切さと、『人』とのつながりの大切さです。

参加者の良さを見つけ、その良さを引き出すのも参加している人。地域の中にある『場（活動）』とS&Sをつないでくださるのも人。S&Sという『場』を知り、企業とつないでくださるのも人。農作業やゴミ拾いなどの活動をしていると、気にかけながら見守っていてくださるのも人。

いろんなしんどさを抱えた人が、人とのつながりの中で、その人らしく働き、暮らせるようになっていく『場』づくりが、社協がつくる社協らしい働く『場』だと思っています。

（担当者　細野　淳子さんより）

眞弓：極端に言えば、「働く」だけが良くなっても、「暮らす」ことに困りごとを抱えていたらその方の生活はよくならない、ということですよね。資源を見つけるという意味でも、「働く」を含めた「暮らす」を支えるという意味でも、地域の人の暮らしを見つめることは大切です。

城：週40時間働くことはできなくても、たとえば1～2時間、これならできるという人がいる。その「できること」を「できるようにやったら良い」社会にしたいですね。その実現に向けて、まずは私たちが圏域をこえてつながりをつくっていきましょう！

「はたらく場」の数だけ、可能性が広がります！

本冊子の発行によせて

小委員会リーダー　城貴志

私たちは「働く」ことで何を得ているでしょうか。普段あまり考えないことかもしれませんが、思い付くままに書き上げてみてください。正解がある訳ではないこの問いに様々な「キーワード」が出てくると思います。お金、仲間、達成感･･･等と言ったことでしょうか。

私自身、頭の中に、「人の役に立つ」「役割を持つ」「人からあてにされる」といった、言葉が浮かんできます。働くことで得ている「ありがとう」「助かったわ」と言った何気ないこの言葉は、人の役に立つことで自分の居場所を確認したり、「あてにされる」ことを実感したりと大きな生きる力を生みだしています。また、働くことで、仲間や地域とつながることができ、孤独・孤立から守られます。

しかしながら、地域には働きづらさを抱えている人達がいます。障害のある人や経済的困窮にある人への就労支援に関する様々な制度・施策が整備されてきているなかにおいても、制度の狭間で「働けるようになりたい」「働きたいと思える自分になりたい」といった苦悩を日々抱えておられる方がいるのです。

私たち「働きづらさを抱える人の働く場づくり小委員会」は、5年間の活動のなかで、「小さな手伝ってもらえればうれしい困り事」や「ちょっとした工夫によって切り出された仕事」を地域でつくり、探してきました。また、その仕事と「はたらく体験」をしてみたい人を、結び付けるモデル的実践をして参りました。

その結果、はたらく体験の経験を契機として就職していかれた方や、まだ就職までは距離があっても、「自分の居場所と役割」を見つけられ、生きる力にされてきた方を見てきました。まさに実践から「はたらく」ことの意義や重要性、尊さを学んできました。

難しいことではありません。職場や地域で困っていることを、働きづらさを抱えた人の力で解決すべく仕事を切り出していただきたいのです。「ちょっとしたこと」でもよいのです。そのことで地域に数多くの「はたらく体験」の実践が展開されることで、自分の居場所と役割を感じ、生きる力に繋がる方が多くおられるのです。誰もが輝き、つながり、支えあう地域が実現できます。是非、一緒にそのような地域をつくっていただけると幸いです。

はじめよう！はたらく体験　**2019年1月23日発行**

【発行】社会福祉法人滋賀県社会福祉協議会

【企画・編集】滋賀の縁創造実践センター　働きづらさを抱える人の働く場づくり小委員会

【問い合わせ】社会福祉法人滋賀県社会福祉協議会 事業部門　地域福祉担当
〒525－0072　滋賀県草津市笠山7丁目8－ 138
TEL　077－569－4650　Fax 077-567-5160　E-mail enishi@shigashakyo.jp

表紙イラスト
atelier minori

「はたらく」から
うまれるよろこび・・・

「来てくれてありがとう！助かったよ」
ひとつひとつの「働く」が
「喜び」や「自信」、その人らしさの発見につながります。

「ありがとう」を交わし合い、
つながりあう居場所を
地域のなかに増やしていきましょう。

滋賀の縁創造実践センターは、分野や所属を越えた福祉関係者の集まりです。
誰もが「おめでとう」と誕生を祝福され、「ありがとう」と看取られる地域づくりをめざしています。

本冊子は、三菱財団社会福祉事業・研究助成「困難を抱えた子どもに対する分野を越えた多様な主体の連携・協働による地域福祉実践プロセスの研究」の助成の一部を活用して作成しました。